

2023 年度（第 32 期） 事業計画

自 2023 年（令和 5 年） 4 月 1 日
至 2024 年（令和 6 年） 3 月 31 日

公益財団法人 北海道新聞野生生物基金

＜2023 年度予算案＞

■事業活動支出総額	24,614,250円
(前年度予算	31,816,250円)
◇一般会計	16,690,900円
(前年度予算	23,900,900円)
事業費	15,202,900円
(前年度予算	22,421,900円)
管理費	1,488,000円
(前年度予算	1,479,000円)
◇特別会計	7,923,350円
(前年度予算	7,915,350円)

はじめに

1992 年の設立から 31 周年を迎える公益財団法人北海道新聞野生生物基金は、長引く景気の低迷による一般からの寄付金低迷と超低金利下による財産運用益の低迷が続いていることで財政状況は厳しさを増しており、繰り返す新型コロナウイルスの感染拡大に加え、ロシアの侵攻開始から 1 年を超えたウクライナ危機による諸物価の高騰が大きく影響している。

収益事業のカレンダー事業は、新たに投入した「かわいいどうぶつシリーズ」の認知度を上げ、従来から制作している吊り下げ型と卓上型とともに一般販売による収入増を図り、引き続き収入源の柱としていく。

公益目的事業では、「モーリー」をリニューアルした「モーリー通信」を今年も国内の博物館や図書館はじめ公的施設への配布を拡大し、広く寄付金増を目指していく。

寄付金については、これまでと同様に一般向けのほか、北海道新聞社の社員・OB、販売所などへ引き続き支援を呼びかけていくが、これだけでは収入の目途を立てづらいので、一昨年、企業などに継続的な支援を期待して導入した「サポート企業制度」の維持、拡大を図っていく。

◇収益事業（特別会計）

＊一般販売用カレンダー事業 440 万円

「北海道野生生物写真コンテスト」の応募作品の中から秀作を選び、動物部門の大判吊り下げ型カレンダー、中判の中吊りカレンダーおよび植物部門の卓上型カレンダーを制作し、

当基金や書店などを通じて北海道の野生生物を守る目的と願いを込め販売している。道内外で根強い人気があり、2023年版カレンダーも引き続き収入の柱とする。販売価格は吊り下げタイプ 1500 円（税込み）、中吊りタイプ 1200 円（同）、卓上タイプ 1000 円（同）として、販売数の増加を目指す。なお、卓上タイプはプラスチック製のケースの原価が高騰しているので、形態などを見直す方向で検討を進める。

◇公益目的事業（一般会計）

【普及啓蒙事業】

*シンポジウム・フォーラム 20 万円

2022 年も新型コロナの感染状況をみながら、写真家の山本純一さんのネイチャーフォーラムを開催した。2023 年 8 月には基金設立 30 周年記念事業として過去の写真コンテスト入賞作品の展示とあわせた講演会、9 月には自然写真家の梅沢俊さんのネイチャーミニフォーラムの開催を企画している。このほか、野生生物保護、生態系保全などがテーマのイベントの開催を随時支援していく。

【自然体験活動事業】

（１）環境出前講座 20 万円

基金の評議員ら自然や環境問題の専門家が学校や地域講座などに出向き、得意分野のテーマで講演している。2022 年度はコロナ禍により実施できなかった。コロナの終息目途は立っていないが、5 月には 5 類に移行することもあり 2023 年度は 2 ～ 3 回の開催を目指す。

（２）環境エクスカーショ ン 10 万円（－ 1 0 万円）

2022 年度は道新観光と組んだ自然を探訪し、自然散策と写真撮影を楽しむツアーを実施した。ほか 2021 年に引き続いて中止となった、フットパス・ネットワーク北海道主催の「全道フットパスの集い」に共催で加わることを計画している。

（３）モーリーの森づくり 0 万円（－ 2 0 万円）

2006 年度から当別町の「道民の森」で植樹を行い、2012 年度からは栗山町から用地を借用し植樹する協定を結び、植樹や種の採取・苗づくりなどを夏に実施してきた。道新こども新聞「まなぶん」の子ども記者らから参加者を募った栗山町での植樹は、コロナ禍のため 2019 年度の開催が最後。2022 年度も保育管理のみを行い、2023 年 3 月末で借用期限を迎えたため、適当な候補地が見つかるまで本事業を中断する。

【コンテスト事業】

（１）写真コンテストと写真展 100 万円

2022 年度は、長引くコロナ禍や応募者の高齢化など逆風の中であったが、応募作品数は

前年とほぼ同じ 584 点（△4）の応募で、作品自体の質は遜色のないものであった。収入源であるカレンダー事業につながるため、2023 年度も夏に北海道の野生生物を対象とした写真作品を広く募集するコンテストを実施する。撮影マナーの向上を呼び掛けつつ、北海道の大自然の息吹が伝わる写真を審査委員会で選考する。入賞・入選作は北海道新聞紙上やモーリー通信で紹介する。また、写真展は例年通り 11 月に富士フイルムフォトサロン札幌で開催する。

（２）夏休み自然観察記録コンクール

20 万円

北海道自然保護協会との共催。夏休み前に募集の案内を道内小学校に発送し、9 月中旬締め切りで作品を募集する。入賞・佳作を北海道新聞紙上で発表し、優秀作品は道新こども新聞「まなぶん」やモーリー通信、ホームページで紹介する。好評の入賞作品展も引き続き開催する。

【出版事業】

* 自然情報誌「モーリー通信」の発行

150 万円

2022 年度にモーリーをリニューアルしたモーリー通信を発行する。野生生物保護の啓蒙に役立てるモーリー刊行時の精神を踏襲しつつ、基金の事業や助成事業を詳報し、全国の博物館や図書館などに広く配置することで寄付者増を図る。また、増収策としてサポート企業などに広告掲載を働きかける。

【助成事業】

* 助成事業

320 万円

野生生物基金の助成については、北海道内で認知度が高く、自然保護、野生生物保全に頑張っている団体・個人の活動を広く応援している。2022 年度も前年度と同じく一般 200 万円、別枠の「杉本とき鳥類保護助成基金」100 万円を助成する。4 月中旬の審査会で助成対象を決定する。対象事業の実施期間は原則 1 年間で、計画実施後に報告書の提出を求め、内容はモーリー通信に掲載する。

◇その他の事業（一般会計）

（１）パンフレットなどの作成

10 万円

リーフレットなど、新たな配布用として追加印刷をする。

（２）ホームページの維持・更新

10 万円

基金の活動を広く宣伝・紹介するほか、助成事業や写真コンテストの応募用紙のダウンロードなど、事業の推進にも役立てる。

（３）HoBiC Cでの事業

10 万円

北海道環境財団、北海道立総合研究機構産業技術環境研究本部エネルギー・環境・地質研

研究所（旧環境・地質研究本部環境科学研究センター）と当基金の3団体で2014年に設立した生物多様性保全活動連携支援センター（HoBiCC）の運営費の一部を計上する。特定外来生物セイヨウオオマルハナバチの駆除を進めるため、インターネット上で運営している「新セイヨウ情勢」の運営など、今後も3者協力により生物多様性の保全活動に取り組む。